



# 休講の代替措置

---

7月13日の大雨洪水警報に伴う休講の代替措置(補講)は、とくに実施しない。**不足する2回分はBb9での討論に替える。**

今後は以下の日程で実施する。

- 7月27日 1コマ: **7班と2班**の発表,  
2コマ: **草原論文**に準拠したGW
- 8月3日 1コマ: **1班**の発表  
2コマ: **藤瀬論文**に準拠したGW

# 前時の確認【意図されたカリキュラム】を使いこなす

## 1. 原田論文の紹介

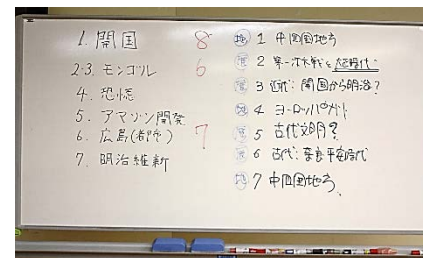
- ①中範囲の理論に基づく単元開発法が説明できる
- ②単元開発法に対して意見を主張できる

## 2. カリキュラムデザイン演習

中範囲の理論に基づく単元開発法を活かして、  
章・節単位の授業構成をデザインできる

## 3. 成果発表・投票

「私たちの単元案」の良さと特徴を説明できる



## 投票結果

1位	4班	9票	◎
2位	3班	7票	◎
3位	1・5班	6票	



# 掲示板でのディスカッション

## 3. 「教育内容としての歴史理論は、基本的に 構造史の理論でなければならない」

歴史の教育をする上で、出来事・事象を個別に捉える事件史という風に捉えてしまうと、ただの暗記教科になってしまうのではないかと思います。それは、事件史だと他との比較が行いにくいいため、批判的に見るための視点を得ることができにくい、また、俯瞰して見るのが難しく、出来事を別々のこととして考えてしまうと思うためです。そのため、因果関係や法則性といった、現代にも繋がるであろう歴史を学ぶ意味の部分が薄れてしまうのではないかと、思います。こうしたことから、構造史の理論を用いることには賛成です。

しかし、事件史は歴史の表層だけを捉えていて、構造史は歴史の深層を捉えている、と一概に言い切れるのかどうか、ということは疑問に感じました。構造史は事件史の中で見られる要素を取捨選択して構成されていると思うので、構造史だけを見るのでは不十分なのではないか、とも思います。

構造史は長い間続いていてきたその社会の根底にある制度や慣習であることをよくわかるように、事件史はその対比として著者は挙げていたに過ぎない。文中には事件史を表層だけのものであるとは著者も述べてはいない、M君の構造史は事件史の要素の積み重ねという意見には賛成で、おそらく構造史は事件史の背景に常に存在していて、逆に事件史は構造史の一部として捉えることができるだろう。その点で相互的な関係にあるのではないか？



# 掲示板でのディスカッション

## 4. 生徒の既存の認識を揺さぶり、知的好奇心を刺激して探求を促すような事例が求められる

このセンテンスの直前に「事例は生徒の読解可能な具体的資料を伴うものでなければならぬ。」とある。3班の発表で、インドのカースト制度、特に異カースト間での結婚についての具体的事例があった。具体的であったこともあり、とても興味を持ったし、もっと知りたいと思った。事例があるのとないのでは全然違うと思います。生徒の興味を引くもの、生徒に合った具体的な事例を適切に選んでいくことが、大切だと思った。

理論に対して批判的に吟味することで子どもの知的好奇心を刺激しながら学習する、ということが興味深かった。また、理論を肯定的に利用しながら展開する授業と、今回の批判的に吟味する授業では子どもに身につく力はどのように変化するのだろうか、疑問に感じた。

大学の研究では、史料価値のあるものが大切にされるのだろうが、生徒にとっての教育的価値という視点で見ると、学術的価値のあるものがすべてというわけではないということ。漫画や小説なども使い方によっては、史料の現物より効果的になりうるのだろう。

児童・生徒という段階に関わらず、興味のないものを探求しようとすることは人間にとって困難。物語や漫画を読んでいて面白い（好奇心をくすぐられる）のは「転」（想像との違い⇨既存認識の揺さぶり）があるからであり、知的好奇心を刺激するためにはこの「転」にあたるような事実の提示や今までとは違った視点からのアプローチをするような授業を展開することが教師に求められている。